

平成19年12月23日（日）

みなとまちづくり生涯学習講座
シリーズ 開港都市「神戸」を語るPart2〔第3回〕

近世兵庫津の都市空間

神戸市立博物館 学芸員 高久智広氏

<プロフィール>

秋田県生まれ。1994年千葉大学教育学部卒業、96年同大学大学院教育学部教育学研究科修了後、97年に同大学大学院社会文化研究科に入学。98年より現職。神戸市域にかかわる江戸時代から明治時代の古文書や古い地図の整理、調査を進め、精力的に研究を行なっている。04年には、港湾都市として繁栄した江戸時代の兵庫津を取り上げた特別展「よみがえる兵庫津」を開催。



近代以降の神戸は全国的にも知られていますが、それ以前の神戸の姿、兵庫津はあまり知られていません。しかし、幕末期の兵庫津の位置づけを考えることは近代の神戸を語る上で必要不可欠であると思っています。

本日は、江戸時代における兵庫津の都市空間がどのような構造を持っていたのかを、古地図、古文書、写真などを通して私なりの試論を述べさせていただき、みなさんとともに



考えていきたいと思っています。

まず、本日お話をさせていただく地域をご紹介します。写真をご覧ください。現在、ウィングスタジアム、中央卸売市場があり、川崎重工、三菱重工、神戸造船所がある地域が対象になります。

南北が約 2 km、東西が約 1.5 km の狭い三日月形のこの範囲は現在、兵庫津遺跡と呼ばれています。そこでは江戸時代に約 2 万人が住んでいました。ほぼ 10 万石の城下町に匹敵する人口規模です。

この地域の江戸時代の姿は、阪神大震災の復興の中で行なわれてきた埋蔵文化財発掘調査によってわかってきました。その研究は、埋蔵文化財の研究にとどまらず、古文書や地図、あるいは建築史などさまざまな分野の方が寄り集まって行なわれ、これまでわからなかった江戸時代の町家の様子、また人々の暮らしを少しずつですが明らかにしつつあります。

兵庫津は当時、西国街道の宿場町として栄え、そしてみなとまちとしても発展しました。中でも 1780 年代頃から 1860 年代にかけて、北前船、そして江戸から尾州、上方までを結んだ尾州廻船が活躍しました。北前船と尾州廻船は、それまでの樽廻船・菱垣廻船のように運賃で儲けるのではなく、安く仕入れたものを違うまちで高く売するという商売形態でした。以前よりも投機的ではありますが、この形態は短い期間で儲けることができます。さらに、北前船と尾州廻船は異なる海域を商売の範囲にしておりましたが、それらの廻船集団を中継する場所としても、兵庫津は位置づけられていきました。

尾州廻船が兵庫津を拠点としていたことを示す証拠が、この常夜灯です。兵庫の和田岬に和田神社という大きな神社があるのですが、そこの鳥居を入ってすぐのところにあります。上の部分は阪神大震災で崩れてなくなってしまいましたが、寄進名が書かれた下の台が現存しています。ここには車屋五兵衛という兵庫の商人の名の他に、江戸、相州、浦賀、尾州といった尾州廻船が関係を取り結んだ地域の商人たちの名が刻まれています。



さて、江戸時代には兵庫津は岡方・北浜・南浜と呼ばれる 3 つのまちのまとまりに分かれていました。海に面せず西国街道の宿駅を担う岡方、海岸沿いにあり港湾機能の役割を担う浜方からなり、浜方はさらに築島船入江という内海を境に北浜と南浜に分かれます。現在の地名でいうと、新川運河の北側の入り口から北が北浜、南が南浜になります。

岡方・北浜・南浜にはそれぞれ惣会所という役所が置かれていました。選挙で代表者と

して選ばれた名主、雇われて町政事務に携わる総代や小使がその惣会所に詰めて兵庫のまちの運営に携わりました。

惣会所が置かれたのは、岡方では西国街道の中でも中心的な町である小物屋町にあり、今も岡方協議会の建物の前には碑が残されています。北浜では鍛冶屋町にあり、南浜では出在家町の阿弥陀寺のすぐ裏手のあたりにあります。

岡方・北浜・南浜それぞれの地域で起こった事柄に関しては、その地域の惣会所が取り扱います。また宗門人別帳などの書類を作成する経費もそれぞれの惣会所で担われています。ただし、兵庫津全体にかかわる大きな問題に関しては岡方・北浜・南浜を合わせて三方といいます。その合議によって決めるなど、実にシステマティックな運営方法が採られていました。

また、それぞれ居住する町ごとに、住人たちの生業にも特色が見られます。文久2年（1862年）の浪花左界兵庫商家繁栄歳中日用記をご覧ください。

岡方には、小物屋町や北中町の呉服、京物など、奢侈品を扱うような商売人さんがたくさん住んでいたことがわかっています。

北浜には鍛冶屋町の北風庄右衛門をはじめ、今でいうところの総合商社のような諸問屋が拠点を置いています。また北海道の方とやりとりをし

ていた商人や、米穀物の仲買問屋も同様に、この地域に集まっていたようです。つまり、北浜は兵庫の有力商人が拠点とする地域であったと言えます。実際この地域は、中世からの町名が見られるところで、古くから交易の中心地でした。



また南浜の関屋町や出在家町に材木を扱う問屋が集住し、浜先地は材木置き場や材木市場として使われていました。

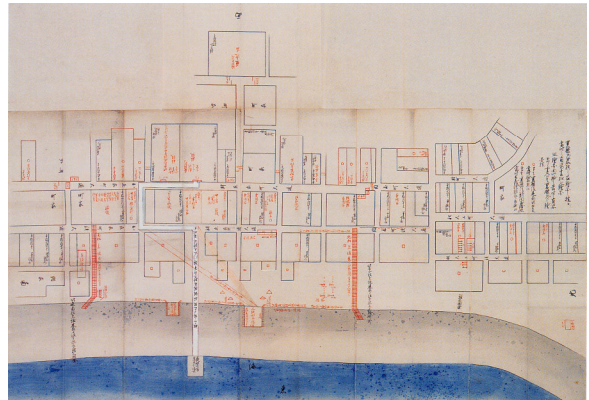
次の絵図をご覧ください。



壱番から九番まで9つの区分があり、それぞれ説明書きがされています。壱番や貳番には12人の交易商人たちが、冬季など航海ができない時期に船置き場として使っていたと書かれています。貳番、参番のあたりは漁師の稼ぎ場や網干場として使われていたことがわかります。また四番にも漁師の荷物を収納しておく小屋があったということがかかれています。次に五番。兵庫津は諸藩の領地から年貢米を積出しするみなとでもありましたので、この東出町から西出町の浜先はその積出場として使われていました。また、船の修理をする場所でもありました。また七番の海岸だけは石垣が組まれ、直接船を乗りつけられるようになっていました。

兵庫津は陸上・海上交通の要所としての機能を持っていましたが、陸上交通については宿駅が置かれた岡方を中心に、港湾機能については海に面した北浜・南浜が分担して担いながらも、しかし能力をこえることについては兵庫津全体でカバーする体制がとられていました。

その事例として、朝鮮通信使が兵庫津に立ち寄った際の応接の仕方についてご紹介いたします。兵庫津は尼崎藩より朝鮮通信使の応接を任されていました。当時それを中心的に担っていたのが南浜です。



通信使は大体400～500人の大規模な使節団ですが、その宿泊施設として使われたのが南浜の浜本陣です。浜本陣は九州や四国などの大名と直接の関係を結ぶ商人で、大名の参勤交代に際し宿を提供したり、年貢米を上方で売りさばくことをまかされたりしています。こうした家が南浜には10何軒ありました。

その隣の写真は、江戸時代後期に朝鮮通信使が上陸した際の宿割図です。浜本陣を中心に周辺の民家を50軒ほど借り上げ、彼らの施設に当てたそうです。

ただし、50軒を使ってもやはり500人の応接はなかなか難しく、その際には岡方にある本来の本陣の方に朝鮮通信使の受け入れを依頼したりしています。



本来の本陣についてみると、こちらには幕府の役人やオランダ商館長が江戸と長崎を往復する際に兵庫津に止宿することが当然ありますが、その時に大名の参勤交代と重複する場合があるんですね。そうした場合には、逆に本陣から浜本陣へ宿の提供を要請することもあったようです。

つまり、この朝鮮通信使の扱いから見ても、江戸時代の兵庫津ではこういった諸種の都市機能を細分化させながらも、それぞれが補完しあう機能的なまちであったことがわかります。

そうした都市空間を持つ兵庫津において、宝暦から文化年間にかけて大きな出来事が起こりました。それが明和6年の上知です。兵庫津は尼崎藩領から幕府領になりました。

それ以降、兵庫津では大きな開発動向が見られるようになります。なぜならば、それまでは尼崎藩が自藩の有利になるようにと兵庫津の経済に対し庇護を与えていたのですが、幕府領になったことで、大坂など他のみなとや都市との競合が激しくなったからです。兵庫の商人たちは、この状況についてどうにかしなければいけない、兵庫の港湾施設を本格的に修築しなければいけないと思ったのではないのでしょうか。

次に、当時の大規模な港湾開発について年代の異なる絵図を比較しながらご紹介いたします。

「元禄絵図」（元禄9年（1696）「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」）は、兵庫奉行の坂田又右衛門が命令して作成したもので、町方の部分に関して非常に精度の高い絵図です。これと明和6年に兵庫津が幕府領になった年に作成された絵図を比較してみますと、東出町、西出町の浜先は拡大しているのがわかりますし、湊口惣門を超えて町場が展開したのもわかります。この70年間での一番大きな変化は東川崎町が新たにできたことです。

今度は、幕府領編入から30年ぐらい後の寛政8年の絵図と比較します。先ほどの70年間よりはるかに大きな開発が進んでいますね。まず、佐比江を埋め立てて佐比江新地という新しい町ができていること、そして海岸部一帯の開発が大きく進んでいることがわかります。さらに耕作地を屋敷地にする開発も行われており東川崎町はさらに大きくなっています。

ご覧いただければ一目瞭然、浜方にみえる町場の幅が違いますね。北浜の嶋上町から宮前町の海岸には、先ほど申し上げたように石垣が組まれていました。そこに新たにこれだ

けの土地が出現している。実はこの5町が面する地域では東西20m、南北300mに及ぶ大きな海岸の埋め立てを安永6年に幕府に申請しているんです。その結果できた土地は2160坪あまりにもなるものでした。

寛政図から嘉永図を比較しますと、兵庫は特に東北方向へと町場の拡大を進めていきます。西出町、東出町、佐比江新地、湊町、東川崎町では連続する町場がつくられていき、さらにそれは海岸線に沿ってだけではなく、西国街道に沿っても展開し、幕末まで続いています。

以上のようなことが基礎となり、近代の兵庫開港へとようやく結びつくわけです。

しかし、兵庫開港は最終的には兵庫の開港ではなく、神戸での開港となりました。

文久元年に最初の駐日イギリス大使であるオールコックが来津し、兵庫の開港について幕府の役人と議論した際には、兵庫を開港すること、外国人居留地は和田岬付近とすることで一致しています。ですが慶応元年9月、条約勅許を求める外国公使が兵庫に来た際には、現在の神戸港が案として浮上し、慶応3年4月に外国人居留地に関する取り決めが締結される際には、神戸村の東側、現在の場所での開港は確実になっていました。

「新修神戸市史」など市史の記述を見ても、なぜ兵庫開港ではなく神戸開港になったかについてはあまり触れられていません。そこで候補から外れたその理由を、幕末の兵庫の状況から考えてみたいと思います。

1つの要因として、文久期から慶応期にかけて行われた砲台の築造が挙げられます。

大坂守衛という面ではこの地域は非常に重要です。江戸時代はじめごろも、この近辺の守衛として尼崎藩という幕府の譜代大名が置かれ、軍事的にも「咽喉の地」だといわれています。

和田岬は江戸時代の初めの頃より不審船監視の重要な拠点で、船見番所が置かれています。寛政期になっても番所は置き続けられ、嘉永7年(1854年)にロシアの艦隊が大坂湾に侵入してくるという事件があったときに船見番所は異国船の監視の最前線として機能し、勤番していた与力は船見番所に詰めて大坂町奉行所に対して注進しました。

その後、大坂湾の海防は抜本的に見直され、警備の担当は尼崎藩等から何十万石という大きな外様の藩が担当するようになります。

砲台の築造も文久期には行なわれます。攘夷実行を責めたてる尊皇攘夷派に対する幕府

の策のひとつとして行なわれたのが、西宮・兵庫・天保山等への洋式台場の築造です。砲台の築造は文久3年から老中格の小笠原長行を中心にし、勘定奉行、大坂町奉行、目付による御台場御用掛体制の配下によって進められます。

しかし、これらの砲台は技術的に不備があり、ずさんな建設がなされていたほか、幕府首脳自身も、海外との戦争で勝利するという認識は全く持っていませんでした。

とすれば、この砲台を急遽突貫工事でつくった理由はどこにあるのか。実は、砲台が配備される直前の8月、長州征伐に勅命がおりているのです。つまり、この砲台の築造には、実は攘夷実行は名目上のことで、反幕府派に対する幕府の軍事的・技術的な優勢を顕示する点にあったのではないかと私は考えています。

さらに元治、慶応期の兵庫津をめぐる軍事状況を見ていきますと、元治2年には条約勅許を求め、砲艦外交で兵庫津に来津しています。また、これは開港後の話になりますが、1868年1月11日に西宮の警備に向かっていた備前藩と外国軍との武力衝突を滝善三郎が切腹して収めた、いわゆる「神戸事件」が起こります。こういった流れの中で神戸村の東側の開港を幕府は外国側に打診しているわけです。

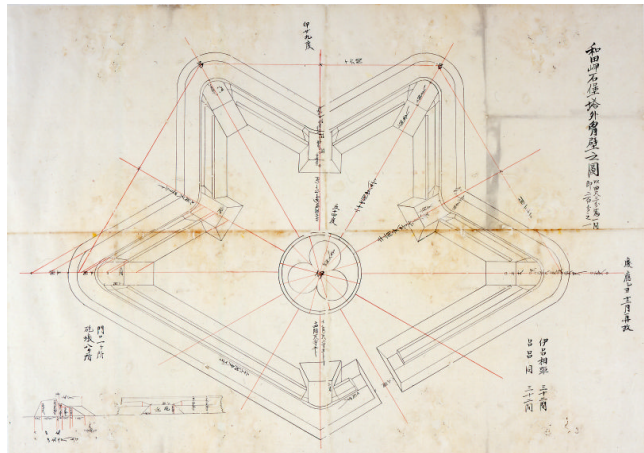
つまりこういった状況が、軍事的にも「咽喉の地」である兵庫を開港し、和田岬周辺を外国人の居留地として提供することを避ける判断につながり、神戸開港に結びついたのではないかと考えています。

さて、兵庫津に砲台の築造を可能としたのには、もう一つ、この地域が工業的な都市としての発展を遂げていたことにもつながりがあると考えています。

先ほどよりお話ししておりますように、全国的な物流の拠点である兵庫という都市機能はあるわけですね。実際、経済力だけではなく技術的な力、さまざまな港湾施設、宿泊施設、流通ネットワークなどを御台場御用掛に命じられていた人たちは余すところなく使っています。

兵庫の鍛冶屋である金屋八左衛門は砲台築造にあたりボルトとナットを納入していましたが、それらのためには旋盤技術が必要になります。この技術が日本に初めて入ってきたのは安政7年、1857年ごろなのですが、砲台が造られたのは1863年です。つまり、わずか7年後には最新の技術を兵庫の鍛冶屋が持っていたといえます。つまり、それを入手できるだけのネットワークが兵庫にはあったということがわかるわけです。

さらに、砲台の中心の丸い石堡塔は石組みですので、防水施工しなければなりません。その防水施工の技術は海外からの新技術を使っているわけではなく、実は和船の船大工による技術を援用していることがわかっています。兵庫には全国的に見ても技術力の高い商人や職人たちが集中しており、彼らの持つ技術が使われていたのです。



これは和田岬砲台の設計図ですが、中央に石堡塔という石づくりがありまして、周辺にこういう五稜郭型のものがありました。現在も石堡塔だけは三菱重工の敷地内に残っています。つまり砲台の築造には兵庫津に蓄積されていた高い技術力が反映されていたのです。

そして明治以降には、加賀藩やその支藩である大聖寺藩が製鉄所をつくり、後に国の工部省に引き継がれます。さらに後には民間に払い下げられて川崎造船所となりました。また和田岬砲台の跡地は維新後に陸軍省の管理となりますが、明治29年には和田倉庫株式会社に払い下げになります。そして翌30年には三菱が買い取って現在につながる造船所をつくっていくわけです。このように兵庫津では明治以降、近代的な造船、中小の造船、修船事業の展開がなされる地域になっていきます。

最後に簡単にまとめさせていただきます。
兵庫津は商業都市であり、かつ付随する形で先進的な工業都市としての性質を持つにいたりました、つまり、近世後期にはすでにこの地域は産業の拠点とな



る素地を形成していたのではないかと考えています。

明治以降になりますと、兵庫の地域は神戸に交易の拠点としての地位を奪われていき、神戸港の発展にのみ込まれる形で兵庫、神戸両港一体の築港議論に明治20年度以降組み込まれていくことになります。しかしながら、今なお脈々と、兵庫津の造船業などが受け継がれているわけです。幕末の段階で兵庫が持つに至った軍事的な側面とか工業都市的な側面は、明治政府の富国強兵政策の中で、神戸港の発展を軸に拡大する「大神戸市」に包摂されつつも、性格としては継承されていたのだと考えます。

本日はご静聴ありがとうございました。